

病 害 虫 の 発 生 概 況

〔病害発生概況〕

1. 稲

2000年は梅雨前線が比較的不活発であったことに加え、梅雨明け後は好天に恵まれて、稲の生育は順調に進み、病害の発生は全般に少なかった。

いもち病は、北九州では6月下旬、南九州では5月下旬頃から発生した。早期水稲、普通期水稲ともに7月下旬頃から病勢が急激に進展して多発生が懸念される地域が出現し、佐賀、大分、宮崎、熊本の各県では注意報が出された。この時期は曇天の日が続き BLASTAM による感染好適日が連続して出現していた。しかしその後は好天が続いたこともあって、病勢の進展は停止し、全体として平年並みないしやや少発生にとどまった。穂いもちの発生も、平年並みであった。7月下旬頃からの病勢の急進展は、気象条件のほか、1999年産の種もみの保菌率が高い傾向にあり、苗での病原菌の持ち込みが多かったこと、箱施薬の残効が切れる時期に当たっていたことなども関係すると考えられている。

紋枯病は、夏期高温となったこともあって、平年よりやや多発生した地域が多かった。佐賀県では、7月下旬から発生が認められ、一部の圃場では多発した。しかし、薬剤による基幹防除の徹底で発生が抑制された。

このほか福岡県や大分県で、もみ枯細菌病菌による苗腐敗症が発生した。また、鹿児島県や宮崎県では黄萎病の発生が多くなっているが、ツマグロヨコバイの増加との因果関係や収量への影響などは、明らかでない。

2. ムギ

開花期に好天が続いたため、コムギ、オオムギともに赤かび病の発生は少なく、その被害が問題となることもなかった。また、うどんこ病の発生も少なかった。抵抗性品種が作付けされるようになったこともあって、縞萎縮病の発生も少なくなっている。近年二条オオムギで発生が目立った斑葉病と網斑病は、種子消毒が徹底されたことで、減少傾向に向かっている。

3. 大豆

8月中に夕立が多かった一部地域で、葉焼病、べと病、紫斑病などがやや多くなったほかは、ダイズ病害の発生も全般的に少なかった。

4. ジャガイモ

生育期が少雨であったため、疫病の発生は少なかった。青枯病も、生育期の少雨と土壌消毒の実施で、少発生にとどまった。モザイク病、葉巻病なども、種芋の更新とアブラムシ防除の実施で、発生が少なくなっている。

5. 野菜

野菜類の病害は、全体としてほぼ平年並みまたは平年より発生がやや少ない傾向であった。それぞれの作目ごとに特記すべき病害の発生状況は、以下の通りである。

ナス：すすかび病の発生がやや多い傾向が目立った。福岡県の冬春作では、1999年12月頃から発生が目立つようになり、注意報が出されたが、その後は小康状態となった。佐賀・熊本両県の冬春作でも、やや多い傾向であった。このほか大分県の一部地域では青枯病が多発し、熊本県の夏秋作ではうどんこ病がやや多い傾向にあった。

トマト：1999年に九州では初めて発生が確認された黄化葉巻病は、佐賀、長崎、熊本各県で発生地域をさらに拡大した。今後の動向が懸念される。熊本県では、黄化えそ病の発生が初確認された。現時点での被害は少ないが、黄化葉巻病同様、今後の動向が懸念される。このほか、鹿児島県の冬春作では、疫病の発生が多かった。2月の高温と日照不足が関係していると考えられる。また、大分県の一部地域でかいよう病と青枯病の発生が多かった。

ピーマン：熊本県で黄化えそ病の発生が初確認された。そのほか、大分県の夏秋作でうどんこ病の発生が多かった。9月以降の連続した降雨と気温の日較差の拡大が関係しているものと考えられる。また、鹿児島県の冬春作では、斑点病が多発した。2～3月の気温が低く、湿度が高かったためと考えられている。

キュウリ：熊本・沖縄両県の冬春作で、うどんこ病の発生が目立った。また、佐賀県の抑制キュウリや宮崎県の冬春作で、褐斑病の発生が多かった。天候やブルームレス台木の使用が、褐斑病の増加に関係していると考えられる。福岡県ではべと病の発生が多かった。また、ズッキーニ黄斑モザイクウイルス（ZYMV）による急性萎凋症が発生した。

スイカ：鹿児島県で炭疽病が多かった。5月下旬に降雨が多く、適期に薬剤散布ができなかったためと考えられる。

カボチャ：鹿児島県では、うどんこ病の発生がやや多かった。10月に雨が少なかったためと考えられる。

イチゴ：福岡県では *Colletotrichum acutatum* による炭疽病の発生が多く、注意報が出された。佐賀県では、イチゴの品種更新に伴って疫病の発生が増加している。また萎黄病の発生が増加している。保菌親株から採取した罹病苗が本圃に持ち込まれたことや、本圃の土壌消毒が不十分であったためと考えられる。

キャベツ、レタス：1月の気温が高かったため、福岡県では菌核病の発生が多かった。

ハクサイ：大分県の冬春作で、べと病の発生がやや多かった。

ネギ：大分県ではさび病の発生がやや多かった。暖冬で経過したことと関連があると考えられる。

6. 茶樹・花き・特用作物

2000年は、茶樹・花き・特用作物の病害で特に大きな被害を生じさせたものはなく、全般的に平年並みかやや少ない傾向であった。しかし、鹿児島県や宮崎県では茶

の炭疽病が三番茶摘採から秋芽生育期にかけて急増し、宮崎県では注意報が出された。

サトウキビでは、感受性品種（農林9号）が多く栽培されるようになって、黒穂病の発生が多くなってきている。さび病もやや多発した。

花きでは、キクの白さび病などの発生が認められたが、大きな問題とはならなかった。

7. 果樹

今年度は春先から好天に恵まれたこともあり、全般的に果樹における病害発生は少なかった。

カンキツでは各県とも4～5月に降水量が少なく、適期防除に努めたことからこの時期の病害発生は少なかった。しかしながら、梅雨期以降、多雨と越冬病斑が多かったことにより、かいよう病が鹿児島県で多発し、熊本県でもやや多となった。さらに、沖縄県でも台風や予防散布の不徹底により、8月下旬以降、果実発病がやや多となった（黒点病もやや多）。鹿児島県では黒点病も7月以降の大雨と平年より多い枯れ枝発生量のため、多発生となり、佐賀、長崎県でも同様の理由でやや多となった。本病の多発は一部園で適切な防除を欠いたことも一因である。この他、灰色かび病が開花期ステージの不揃いと多雨により佐賀県でやや多となり、宮崎県ではそうか病菌の薬剤感受性低下が一部で認められた。

ナシでは大分県で黒斑病が‘二十世紀’や‘新水’で多発し、黒星病も‘豊水’、‘幸水’でやや多となった。越冬芽基部病斑が多かったことと発芽～幼果期防除の不徹底が原因である。また、同県では冬胞子堆の膨潤が遅れたことにより、赤星病も全品種でやや多となった。佐賀県では葉炭疽病が前年に続いて‘豊水’や‘新高’で発生し、特に‘豊水’で多発した。

ブドウでは晩腐病が福岡県の一部地域の露地栽培で多発した。袋かけの遅れや防除効果の高い薬剤が少ないことが原因であり、今後、発生生態の解明を含めた効果的防除体系の確立が望まれる。この他、佐賀、鹿児島県において、べと病が収穫後防除の不徹底や多雨のため8月から急増し、やや多～多となった。また、大分、鹿児島県では同様の理由により褐斑病がやや多となった。

ビワでは長崎県で、8月中旬の多雨およびナシヒメシンクイの多発生により、がんしゅ病が夏の枝葉でやや多となり、灰斑病は5月以降の多雨により、収穫後の発生が春葉および夏葉においてやや多であったが、果実腐敗は平年並みであった。

その他の果樹の病害では特に目立ったものはなかった。

（九州農業試験場地域基盤研究部 西 和文）

（果樹試験場カンキツ部（口之津）伊藤 伝）

【害虫発生概況】

1. 稲・麦

年明けから比較的高温が続いたが、昨年に比べ高温の程度は緩やかで、日照時間も長いことから、水稻の生育は順調に推移した。

梅雨入りは、九州本土ではほぼ平年並みであったが、その時期、移動性高気圧に覆われた沖縄・奄美地方では

平年より1週間～10日ほど遅れた。梅雨前線の活動と関係するウンカ類の飛来は平年と比べるとやや遅めで、主要な飛来波はセジロウンカで6月下旬、トビイロウンカでは7月上旬にみられた。飛来量は全般に少なく、特にトビイロウンカは近年希にみる少飛来であった。その後の発生量もイミダクロプリドやフィプロニルを含む長期残効性を示す育苗箱施薬剤の普及などあって、全地域「平年並み」以下の少発生となった。

同様に中国大陸から飛来するコブノメイガの主要な飛来波は6月下旬から7月上旬にみられ、その後も断続的に7月中下旬まで続いた。飛来量は平年並みかやや多めで、その後の発生はやや多かった鹿児島県の一部を除き大部分の地域では少～並み発生であった。コブノメイガの場合もフィプロニルを含む長期残効性農薬の普及が多発生を抑える一因をなしているものと思われる。

近年の特徴として、斑点米カメムシ類の多発生を挙げることができる。本年も並み発生だった沖縄県と宮崎県を除く九州全域でやや多から多の発生を示した。斑点米カメムシの優占種は従来、クモヘリカメムシやホソハリカメムシとされてきたが最近では、それらに加え、アカスジカメムシやアカヒゲホソミドリカメムシ等、従来九州以北で問題となっていた種の増加が目につく。考えられる多発の原因は、昨年の春先から続いた高温環境がカメムシの増殖に好適だったこと。加えて、増殖の温床となる休耕田やイタリアンライグラスをはじめとする飼料作物の栽培面積が増えたことなどが挙げられる。

水田初期に問題となるスクミリンゴガイは北部九州では並み発生であったが、大分、宮崎、鹿児島、沖縄の各県でやや多から多の発生がみられた。昨年の暖冬が越冬量を増加させ、さらに梅雨期の多雨現象が被害の増大に結びついたものと思われる。

ツマグロヨコバイの発生は長期減少傾向が続いており、本年も少から並み発生の県が多かった。しかし、鹿児島県の一部では、最近、逆に増加する傾向がみられ、本虫によって媒介される黄萎病も増えている。近年、本種に対しては効力が弱いとされるフィプロニル粒剤が育苗箱施薬剤の主流として急速に普及したことが原因しているものと思われる。

麦類では特に問題となる害虫の発生はみられなかった。

2. 畑作物

大豆：7月下旬から8月上旬にかけてフェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺数が平年値を上回り、福岡、大分、熊本、宮崎の各県で注意報が発令された。熊本県ではそれを受けて8月2から3半旬に緊急防除を行い、場所によっては全防除回数が8回にも達したところもあった。にもかかわらずその被害を十分に抑えることができなかったため、使用した薬剤に対する本虫の感受性低下の可能性が疑われている。その他の県では、注意報発令後（盆前）の防除と断続的あるいは局地的な降雨に見舞われたこともあり、幼虫密度が急激に低下し、被害の程度は軽かった。子実被害性のカメムシ類の発生はやや多かった福岡県を除き平年並みの発生であった。

サツマイモ：主要産地である鹿児島県の南部地域で8月以降イモキバガの多発生がみられ、ハスモンヨトウもやや多かった。しかし、ナカジロシタバやエビガラスズ

メは発生量、時期とも平年並みであった。宮崎県や沖縄県等、他の主要産地ではいずれも平年並みの発生を示した。

ジャガイモ：主要産地である長崎県では春作、秋作ともアブラムシ類、ニジュウヤホシテントウ、ジャガイモガ等の主要害虫はやや少から並みの発生であった。

3. 野菜・花き類

共通：トマトハモグリバエは1999年に沖縄県において初めて発生が確認された侵入害虫であり、同年に山口県、京都府においてもトマトで発生が認められている。その後、本種は2000年の夏期に熊本県でトマトとメロン、長崎県でトマトにおいて発生が確認された。また、同年の秋冬期にかけて大分県、福岡県、宮崎県、鹿児島県においてトマトで本種が認められ、特殊報が発令された。寄主植物はトマトが主体であるが、メロン、カボチャ、キュウリ、マリゴールド等でも寄生が確認されている。本種はマメハモグリバエと形態が極似していることや両種が混発する機会が多いことから、今後の分布拡大には十分注意を払う必要がある。

ミカンキイロアザミウマはミナミキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマと混発する傾向がみられる。キクで多発した事例がみられるが、発生は落ち着く傾向にある。沖縄県では、1999年に本種の侵入が確認されたが、その後再発はみられていない。

ハスモンヨトウは初夏から発生がみられるようになり、イチゴ、サトイモ等の多くの野菜・花き類で夏秋期にかけて多発する傾向にある。また、イチゴでは晩秋期から初冬期まで発生が長引く傾向がみられている。

マメハモグリバエは鹿児島県でソラマメやインゲンで多発したが、全般に発生が落ち着く傾向にある。

ナス科野菜：アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類の発生は全般に平年並みかやや少ない傾向であった。トマト黄化葉巻病の発生が昨年問題となった福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県のトマトでは、媒介虫のシルバーリーフコナジラミに対する防除圧が高まり、コナジラミ類の発生は少ない傾向となった。しかし、佐賀県の冬春ナスや鹿児島県の冬春トマトではコナジラミ類の発生がやや多い傾向にあった。大分県の夏秋トマトではオオタバコガ、鹿児島県の冬春ピーマンではタバコガ類の多発がみられた。

ウリ科野菜：佐賀県の冬春キュウリでコナジラミ類とアブラムシ類、鹿児島県の半促成スイカでアブラムシ類がやや多発するなど一部で発生が問題となったが、アザミウマ類、アブラムシ類、コナジラミ類、ハダニ類の発生は全般に少ない傾向にあった。

アブラナ科野菜：コナガヤアブラムシ類の発生はキャベツ、ハクサイ、ダイコンにおいてここ2～3年少ない傾向が続いており、本年も特に問題となる発生はみられなかった。

イチゴ：ハダニ類は佐賀県、長崎県、宮崎県で多発傾向がみられた。アブラムシ類は全般に平年並みかやや少ない発生であったが、佐賀県では育苗期に発生がやや多かった。

ネギ類：シロイチモジヨトウが大分県の秋冬ネギで多発したが、特に目立った害虫の発生はみられていない。

その他の野菜：熊本県のハウレンソウでハウレンソウケナゴコナダニの発生がみられた。佐賀県では、ハダニ類とアザミウマ類がアスパラガスで多発した。沖縄県では、ミズイモのオキナワイナゴモドキが多い傾向にあった。

花き類：ツツジグンバイは長崎県でやや発生が多かった。熊本県の露地キクでは、アザミウマ類とハダニ類が多い傾向にあった。また、沖縄県の秋キクではシロイチモジヨトウの発生がやや多かった。

4. 果樹

共通：果樹カメムシ類は前年秋季の発生量が多かったことから、越冬世代の成虫が5月から7月にかけて多発し、7県から注意報が出された。しかし、本年は主要な増殖源であるヒノキ、スギの球果量が平年に比べて少なかったため、8月中旬以降の当年世代の発生は少なくなった。

カンキツ：ミカンハダニは佐賀、長崎、熊本、沖縄県で多発した。その要因として、4～5月の少雨により初期増殖が好適であったこと、またミカンの裏年のために、冬期・夏期マシ油乳剤の散布が控えられた園が多かったことが考えられた。ミカンサビダニが熊本、鹿児島両県で、リュウキュウミカンサビダニが沖縄県でそれぞれやや多となった。チャノキイロアザミウマは長崎県でやや多となった他は並み～少発生であった。アブラムシ類は春の少雨により福岡、佐賀、熊本、鹿児島県で多発した。ゴマダラカミキリが佐賀県で管理不良園を中心にやや多となった。ミナミトゲヘリカメムシによるカンキツの吸汁害が、9月下旬から10月上旬にかけて佐賀県の一部の園地でみられた。ハウスミカンでは佐賀、鹿児島県でネギアザミウマによる着色期の果実被害が問題となった。

ナシ：ハダニ類が佐賀、長崎、熊本、鹿児島県でやや多となった。ナシヒメシンクイが7～8月の少雨のために長崎、熊本県でやや多発した。アブラムシ類は佐賀、熊本、大分県で春の少雨により多発した。

モモ：主要害虫の発生は平年並みであった。

ブドウ：主要害虫の発生は平年並みであった。

カキ：フジコナカイガラムシが福岡県で多発した他は平年並みの発生であった。

5. 茶樹・特用作物

茶樹：害虫の発生時期はほぼ平年並みであった。発生量は鹿児島県で一番茶および二番茶でカンザワハダニが、また秋芽発育期にはチャノホソガが多発し問題となった。福岡県でも同様の傾向がみられ、両種の発生が平年に比べてやや多かった。その他の害虫はほとんど平年並みの発生量であった。

サトウキビ：カンシャワタアブラムシの発生が平年に比べて早く、また発生量も多かった。その他の害虫はほぼ平年並みの発生を示した。

(九州農業試験場地域基盤研究部 菅野紘男)

(果樹試験場カンキツ部 (口之津) 大平喜男)

(野菜・茶業試験場久留米支場 柏尾具俊)